

はじめに

柳 哲雄

水は植物・動物の生命を維持するために欠かせない。ある場所の生態系も人間生活も、その場所の水の存在のあり方に大きく依存している。

しかし、水はある場に留まっているわけではなく、常に動いていて、その形態を変えながら循環している。

まず地上への降水が多様な植物を育み、河川水や地下水を函養する。そして、その植物を餌とし、また河川水や地下水を飲料水として様々な動物が生育可能となる。様々な動物の食物連鎖の頂点に居る人間も、水循環に支えられた様々な動物の一部であることを基本的には免れ得ない。

常に水が存在している場所もあれば、ある時期に降るわずかの降水をある場所に貯蔵し、貯蔵されたわずかな水で、降水のない時期に必要な水のすべてをまかなわなければならないような場所もある。

地上の水の一部はその場所から蒸発散して、水蒸気として大気中に帰り、また河川水や地下水はやがて海へと流出する。さらに海水の一部は海面から蒸発し、同じく水蒸気として大気中に帰る。そして、大気中の水蒸気は風により蒸発散した場所とは異なった場所に運ばれ、さらに上昇気流により、より低温の上空に運ばれ、そこで雲となり、やがて降水となって、再び地上に降ってくる。

このような水の存在形態・循環形態はすべての場所で同一ではない。例えば蒸発散した水蒸気はその場の上空で直ちに雲となり、降水として再び降ってくるような、短い時間で水循環が起こっているような場所もあれば、その場の降水ははるか離れた海洋から蒸発した水蒸気により主に担われていて、降水が河川水として海にそそぎ、その海面で水蒸気となり、風によりもとの場所まで運ばれ、再び降水として降ってくるというような、非常に長い時間かかって水循環が起こっているような場所もある。

このような水循環形態や水の存在形態の相違と、その場所の生態系、さらにその場所に住む人々の価値観や文化、すなわち地域特性はどのような関わりを持っているのだろうか。

ここでは、東南アジアを舞台にふたつの異なった水循環形態とそれぞれの場所での生態環境

の特徴、さらにその場所に住む人々の価値観の特徴とその違いを考えてみたい。

本研究は二重の意味で「総合的地域研究」であることを目指している。ひとつは海洋学、水文学、土壌学、森林生態学など専門を異にする研究者が集まってある地域を研究しているという意味（Interdisciplinary Regional Study）において、またいまひとつは東北タイ、ボルネオ、西アフリカという3つの地域を相互に比較しつつ研究を行っているという意味（Interregional Study）においてである。

そのような意味で、はたして本研究が「総合的地域研究」になりえているかどうかは読者の判断にゆだねたい。